戸谷洋志氏からのコメントにたいする応答

品川哲彦[1]

私の発表にたいして、戸谷氏（以下、戸谷と略記）はまず彼自身が補足した書誌情報を含めて私の発表の内容の再構成を試みられた。そのあとで「以上の筆者の見解が正しいのだとしたら」[2]という条件のもとで、ひとつの質問を寄せられた。（ちなみに、上述の「筆者の見解」という表現が指しているのは拙論の要約だから、そのなかには戸谷自身が疑問を向けている私の主張を含んでいる。したがって、その部分を指すなら「筆者の見解」というよりも「筆者の要約」と記すべきところだろう）。

争点に向かおう。ブルトマンのヨナス宛書簡のなかの「あなたがしたように、神に向けての、ないしは、神の前での責任は、神にたいする責任であるといってよいでしょうか」[3]という箇所を、私はヨナスにたいする「ブルトマンの批判」[4]と捉え、そのように表現している。そのうえで、拙論は、「神の前での責任」と「神にたいする責任」との異同を問うブルトマンの問いに含意された批判を「ヨナスは受け容れたことになるのか、ならないのか。私はなると考える。ヨナスがブルトマンに『あなたが私を誤解した唯一の点』（ZNE：72）と応じているのが神義論の疑惑である以上、ヨナスは責任概念の用語法に関するブルトマンの質問をその批判を含めて受容したと解すべきである」[5]と結論している。

これにたいして、戸谷は「ヨナスは本当にブルトマンの不満を自身に対する批判として認識していたのか」[6]という疑問を呈している。戸谷自身はヨナス自身がこれを批判とみなしたという証拠がないと主張する。

まず、拙論は「解すべきである」と記したように、ヨナスが実際にそれを批判として受け止めたという事実を論証しようということが意図ではなく、いっそう整合的で肥沃なヨナス解釈を示すことが意図である。とはいえ、私が提示した読解のなかには、ヨナスはブ

1　品川哲彦（しながわてつひこ）。関西大学教授。
2　戸谷洋志、「品川哲彦『神に対する人間の責任という概念は成り立ちうるか』へのコメント」、本号 22 頁。
3　Jonas, Hans, *Zwischen Nichts und Ewigkeit. Zur Lehre vom Menschen*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1963, S.65、品川哲彦「神に対する人間の責任という概念は成り立ちうるか」、本号、８頁。
4　品川、同上、10 頁。
5　品川、同上、10―11 頁。
6　戸谷、前掲、22 頁。

ルトマンの質問を批判として受け止めただろうという解釈が含意されている。したがって、拙論にたいする戸谷の主張は、(1)ヨナスはブルトマンの上述の問いを「批判」として認識していなかったということ、(2)拙論の示した読解の整合性ないしは肥沃性も疑わしい、という二つの部分から成る。さて、はたして、このように考えることは説得的だろうか。

(1)については、ブルトマンの問いをもう一度読んでいただきたい。「あなたがしたように、神に向けての、ないしは、神の前での責任は、神にたいする責任であるといってよいでしょうか」。戸谷は、これは批判ではなくて、たんなる質問だというのかもしれない。しかし疑問に「あなたがしたように」という語句がついている以上、この疑問は「あなたがそうしたのは誤りである」という批判が含意されていると私は考える。この質問を読んで、そこに、戸谷がその可能性を想定しているように、「ヨナスはブルトマンの不満を自身に対する批判として認識」しなかったという可能性は考えがたいと私は判断する。

では、戸谷は、なぜ、批判として認識しなかったという可能性のほうを選ぶのだろうか。その論拠は、ヨナスがブルトマンからの批判と認識した論点はヨナスがはっきりと「異議（Einwand）」という語を用いた箇所[7]に限定して考えるべきであり、その箇所には私の論じたブルトマンの質問が明示的には言及されていないということである。

戸谷はその箇所の訳を示している（「さて、貴方の異議に対して。それは二重の形をとっています。すなわち、観点が『美学的なもの』であり、『外側からの』ものであるということ、そしてそれは『固有の実存了解の表現ではない』ということです。私にはこの異議を完全に否定することはできません。それでも、私は適正に判定したいと思います」[8]）。だが、戸谷はこの箇所の解釈を示していない。だから、戸谷がこの箇所をどう解釈しているのかは明らかではない。ただし、戸谷は「美学的な神概念（品川の表現では『神義論』）」と記している。これは、私見については、誤解である。「美学的」な神概念という観念は、通常、「神義論」とただちに結びつくものではない。

拙論では、ブルトマンの批判にたいするヨナスの応答を、神義論ではないかという疑念と外側からの考察で実存的ではないという批判との二点に分けて説明した[9]。けれども、私自身は、ブルトマンのいう「美学的」という評言は適切ではないと判断したために、紙幅の都合で、その概念を用いた説明を省いてしまった。したがって、以下に、ブルトマンの批評において、「美学的」「外側からの」という批評と「神義論」という疑念とがどのよう

7 Jonas, Hans, a. a. O., S.66-S.67.
8 戸谷、前掲、22 頁。
9 品川、前掲、10 頁。

にして結びついているのかについて説明を補足しよう。それによって、上述の(2)の点についても、拙論の提示した解釈の整合性、肥沃性を証明できるだろう。

ブルトマンの理解では、ヨナスの神話においては、「世界の進行のなかで高まっていく超越的なもの」が語られており、それゆえ、「神的なるものの晴朗（serenity）は内在から超越へとたえず高まることにおいてはじめて生起する（ないしは生起すべき）もの」[10]である。しかしながら、神の領域での晴朗について語るなら、世界の進行のなかで生じる悪を――端的にいえば、各人の死をも――「神の運命の過程のために支払わねばならない犠牲」[11]として捉えざるをえない。そのような眼差しを、ブルトマンは「美学的」[12]と表現した。では、ブルトマンにおいて、この意味での「美学的」という評言が、なぜ、「神義論」ではないかという疑惑と結びつくのか。それは、この世界に悪が存在することの責任を神に帰さないという神義論のもともとの定義によってではない。むしろ、この世界の悪を世界全体の善を実現するための条件として肯定してしまう神義論のその帰結ゆえである。その帰結のもとで、世界の宥和的で晴朗な美しさが保たれる。各人の死もそのなかで肯定される。だから、ヨナスの神話は「私[ブルトマン]には、各自の私が死ぬということ、各自の私の死によって立てられた問いへの答えにはならないと思えます」[13]。それゆえ、「外側からの」考察であり、「実存了解の表現」ではないとブルトマンは難じたのである。

拙論にも明記したように、ヨナスは「外側からの」考察という批判にたいしては、形而上学・存在論を試みる以上はその観点は避けがたいと答えている。だから、上述の戸谷が引用した箇所にも記されているように、彼はブルトマンの批判を完全には否定できないという態度をとる。しかし、戸谷は指摘していないが、ヨナスのブルトマンにたいする応答はそれだけではない。ヨナスはブルトマンが「晴朗」と結びつけた意味での「『美学的』という性格づけを否定しなくてはなりません」[14]とも明言している。というのも、彼の神話は彼にとって「存在と意味の謎のなかへと意味をもたらしたと思われるものを最初に表現した象徴化の試み」[15]だが、そこにいう意味とは、「宥和するようなものやそれ自身で肯定的なものや価値を意味していない」[16]からである。それに続けて、「あなたが私を誤解した唯一の点」という文言がくる。拙論はこの文言を引用して、「ヨナスがブルトマンに『あなた

---

10 Jonas, a. a. O. S.66.
11 Ebenda.
12 Ibid.,, S.67.
13 Ebenda.
14 Ibid., S.70.
15 Ibid., S.72.
16 Ebenda.

が私を誤解した唯一の点』（ZNE:72）と応じているのが神義論の疑惑である以上」[17]と記した。ここにいう神義論が、世界の悪を世界全体の善を実現するための条件として肯定してしまうという意味での神義論であることは直前の箇所から明白であろう。ヨナスにとって、悪を世界の進行のために肯定する神義論の帰結は――ましてや自分の思想がそのようにみなされる誤解は――とうてい受け容れられるものではなかった。なぜなら、「（私の母のような）殺された者たち」[18]の受けた不正はけっして肯定されるものではないからである。けれども、もともとの意味での神義論と同じく、ヨナスにおいても、悪の原因は神に帰せられず、人間こそが悪を為す。しかしまた、ヨナスは、人間が悪を匡し、世界を回復する可能性にも注視する。だからこそ、「（私の母のような）殺された者たち（中略）の受けた不正は（中略）私たち生きている者に回復のための格別の労をとることを要求する」[19]と記すのである。この要求が満たされるのは、私見では、人間が超越についての意識を保ち、したがって、神の「前での責任」「に面しての責任」を自覚するかぎりでのことである。この見解を支える論拠として、「人間の神的なるものに面しての倫理的義務の一部は、この存在の充実を自分のなかに受け容れ、それにたいして目覚め開かれ、その充実を反映し、認識、認識しつつ愛するということなのです」[20]という箇所を引いてもよい。こうした脈絡から、拙論は、（「神にたいする責任」と対比して）「神の前での責任」という概念を明確にすべきだというブルトマンの批判をヨナスは受け容れたと解釈した。

まとめよう。ブルトマンの「あなたがしたように、神に向けての、ないしは、神の前での責任は、神にたいする責任であるといってよいでしょうか」という問いを、戸谷は、ヨナスは自分にたいする批判として認識していなかったと推測し、それにもとづいて、拙論の解釈に疑念を呈した。しかし、戸谷がその論拠として援用した箇所は、戸谷の想定とは違って、上の問いと無関係であるというわけではない。しかもそのつながりは、これまでに示してきたように、戸谷が引用した箇所のなかにある「美学的」「外側からの」「固有の実存了解」といった概念をヨナスがどのように理解し、それにもとづいてブルトマンに反論し、応答したかということをブルトマンにたいする彼の応答のなかから読みとっていくことでたどりなおすことができる。以上で、拙論が提示した解釈に（それがどれほどのものであれ）整合性と肥沃性を見出していただけるのではないかと思う。

---

17 品川、前掲、10-11 頁。
18 Jonas, a. a. O, S.72.
19 Ebenda.
20 Ibid., 71.